

善隣

No.539 通巻806

2023年（令和5年）9月1日発行（毎月1日発行）

2023

9



一般社団法人 国際善隣協会



「将来検討委員会からの提言」会員説明会（2023年7月28日）



会員暑気払い（2023年7月28日）

善 隣

目 次

2023年 9 月号

公開講演会記録

近現代に続く「和魂漢才」の効力

— 嘉納治五郎と松本亀次郎、そして周恩来との出会い ……………王敏 2

「復員船」から見た復員・引き揚げ事業 ……………坂口太助 10

私が見た中国の30年

— 1992年から2022年 ……………山崎由美子 19

陶々俳壇 ……………馬場由紀子 28

中国ウォッチング ……………編・訳 上松玲子 30

協会通信・会員だより・同好会だより …………… 32

2023年 9 月の行事予定…………… 33

— 善 隣 第539号 通巻806号 —

2023（令和5）年 9 月 1 日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋 1-5-5

一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051

FAX 03（3573）1783

発行人 藤沼弘一

編 集 原田克子

編集協力 朝 浩之、山谷悦子

印刷所 (有)ゆにおんプレス

TEL 048-834-1201

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

みんなの写真館 …………… 32

（姜晋如、田畑光永）

——。——。——。——

当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

公開講演会記録

近現代に続く「和魂漢才」の効力

— 嘉納治五郎と松本亀次郎、そして周恩来との出会い

周恩来平和研究所所長 王敏



はじめに

異文化を学ぶむずかしさは学ぶ姿勢にもある。中国文明に学んだ日本は「和魂漢才」を学習理念とした。近現代に入っても異文化に接する日本文化の理念になっている。その真髄とはどういうものか、近現代の日中の3人の歩みの略図を考察したい。また、小文で取り上げる3人の出会いの接点は、共有する「漢才」によるものである。教育の舞台を介して、立場の異なる3人が相互浸透から昇華に至らせたのだ。

近代中国に留学生派遣を促した戦争

隋・唐時代、日本は留学僧や留学生を中国に20回以上派遣し、中日交流史上初の学問への探求の道を開いた。それから千年後、留学の目的地は逆に明治維新後の日本に移った。

アヘン戦争（1840〜42年）が眠れる中国を目覚めさせ、中国は西洋の発展に注目し始めた。中国は1872年、ついに最初の官費留学生30人を米国に派遣した。

日清戦争（1894〜95年）の敗戦

により、中国は近代化の発展において、日本に学ぶ価値があることを認識し、しかも両国は文化や習慣、文字が似ているため、欧米に行くよりも近くの日本へ留学した方が良いと考えた。こうして終戦の翌年（1896年）、中国はすぐにこの考えを行動に移し、留学生13人を日本に派遣し、発展の経験求めた。これによって、中国青年の日本留学の幕が開かれた。日露戦争（1904〜05年）で日本が勝利したことは、さらに中国の奮起を促し、当時東京に集まった中国人留学生は1万人を超えるまでになった。

留学生教育の開拓者・嘉納治五郎

中国の駐日公使を務めていた裕庚は1896年、日本の外務大臣・西園寺公望と交渉し、日本が中国の公費留学生を受け入れることを求めた。西園寺の友人で、当時の東京高等師範学校の校長を務めていた嘉納治五郎（1860～1938年）が、この要請を積極的に支持した。

嘉納は、オリンピック委員会委員（1908年）を務めた最初のアジア人ではあるが、1893年に日本初の公立教育機関である東京高等師範学校の校長を務めた教育者でもある。同学校では約25年間在任した。

嘉納は子どもの頃から四書五経を読み、18歳のときに漢学塾・二松學舎（現在の二松學舎大学）に入学し、その後、東京大学文学部に編入学した。妻・須磨子の父は、かつて森有礼公使に随行し、清国を訪問した漢学者の竹添進一郎だ。竹添は『棧雲峽雨日記』を書き、駐天津領事などを務めた。嘉納の周りは漢学の雰囲気満ちていたと言える。

儒学と漢学は嘉納の人格形成に骨組みされたと言われる。論語の「仁義礼智信」の素地に、17世紀のイギリスの思想家ジョン・ロック（1632～1704年）とドイツの教育者ヨハン・ベルンハルト・バゼドウ（1724～1790年）の考え方を組み立て、「知性、美德、身体」の3つの教育理念を提唱した。

当時、洋学が盛んになる社会的な雰囲気の中で、嘉納が儒教を核とした漢学の価値を唱え、東京高等師範学校の校長の傍ら、中国人留学生を対象にする宏文学院の校長をも兼ねることにした。彼のもつて、日本で進学を目指したのは8000人の中国人学生という。その中に、陳独秀、楊昌濟、魯迅、黃興、楊度、秋瑾、田漢ら、後の中国史における多くの偉人が在学した。

他方、嘉納は、漢学を国学と並行して行う科目の確立を目指して国漢科を設立して、1895年に東京高等師範学校で開講した。続いて宏文学院の松本龜次郎教授に中国語訳付きの日本語教科書の編集を依頼した。教材の特徴は両国で一般的に使用されている漢字

を媒介に日本語を学ばせるところにあり、いわば漢訳和語教授法といえよう。

1902年7月、清末の政治家・洋務派大臣の張之洞の招きで、嘉納は中国に2か月間滞在し、教育視察を行った。『嘉納治五郎大系』（本の友社、1988年）の第9巻には、彼の「清国巡遊所感」が収録されているが、その文章において、彼は帰国した留学生の憂国の思いと現実の制約との矛盾を記し、それをひどく悲しんでいた。また、嘉納は真心を込めて次のように示した。中国自身の発展の特徴に基づいて、改革のペースは急いではならず、平和的かつ緩やかに進んでいく方がいいだろう。教育の分野では、一般教育や産業教育の発展を推進することが当面の急務だ——今でも嘉納の意図や見解は大きな啓発を与えている。

日本で最初に中国人留学生を受け入れる学校・宏文学院

1896年6月9日、『朝日新聞』は清朝の「国費留学生」来日のニュースを報道した。報道によると、蘇州と

寧波から選ばれた13人の留学生を、東京高等師範学校校長の嘉納治五郎は神田区三崎町（現千代田区）の民家に住ませ、東京高等師範学校の教室を指導に使うように手配したとある。

1899年、嘉納は留学生の宿舎に「亦楽書院」という看板を掲げた。言うまでもなく、「亦楽」とは『論語』にある名句「有朋自遠方来、不亦楽乎（朋有り遠方より来る、亦た楽しからずや）」からとったものだ。その後、いっそう多くの中国人留学生が訪ねてきた。嘉納も正式な教育機関にするためのさまざまな準備を徐々に進めていった。当時の外務大臣・小村寿太郎の指示で、1902年に正式な教育機関への改組申請が認められ、「弘文学院」と改名された。

その後、同校は後の文豪・鲁迅、辛亥革命の際に活躍した黄興や宋教仁、中国共産党創設者の一人である陳独秀ら早期の中国人留学生を迎えた。

牛込区西五軒町に移転した弘文学院の校舎は整備され、ますます人々が重視する中国人留学生育成の拠点となった。1906年時点で、在校生数は1

615人に達し、日本最大の中国人留学生のための教育機関となっていた。なお名称は、清の乾隆帝の諱である「弘曆」の「弘」を避けて、「宏文学院」と改められた。教育の形式も中国の需要に対応し、「速成科」に力を入れ、専攻も当時の中国の発展に最も役立つ師範科を中心とした。

1905年7月3日、清政府は帰国留学生の最初の試験でもある御前試験を行った。病気で中退した学生を除いて、日本に留学している13人の学生のうち、7人は進士の称号を授与され、11人は官職を授かった。これについても『朝日新聞』は7月17日、7月20日、1906年6月15日と、数回報道し、中国人留学生へ注目の波を引き起こした。

その後日本で、私費留学生を受け入れる私立学校がぼつぼつ成立したが、宏文学院を含む留学生の間で反政府の言動が現れ続け、社会的に批判されることが相次いだ。そこで、日本政府は清政府と協力して、1905年11月2日に革命活動への参加を制限する「留学生規則」を公布したが、それに対して、留学生の集

団帰国や陳天華の自殺など、抗議が引き起こされる引き金となってしまった。

さらに、清政府によって、公式の学生を派遣する初期段階で実施された「促成教育」方法も調整する必要があると見直される。促成教育以上の教育効果を得るためには、正規教育の正当性が裏付けが必要とされるのである。

「速成科」の修業年限は3か月から1年半まで多様で、各学科の授業は通訳付きで行われた。後に、「速成科」の弊害に気付いた清政府は、日本の文部省と共同して調整し、「五校特約」を締結した。こうして、1908年からの15年の間に、165人の留学生が5校に派遣された。この5校とは、第一高等学校、東京高等師範学校、東京高等工業学校、山口高等商業学校、千葉医学専門学校を指す。清政府は学生1人につき毎年200〜250円の学費を支払った。

その影響で、宏文学院は時代の発展に順応し、1909年に閉校した。7年間という短い期間だったが、その歴史的な使命を果たし、中日が共有する教育史における懸け橋となった。7年



宏文学院の跡地は現在住友不動産飯田橋ビル3号館のエリアにあたる

やされてしまった。今や、その遺跡を知る人はほとんどいなくなった。

2007年、当時の温家宝國務院総理が訪日した際に日本の国会で演説を行い、宏文学院で学んだことのある魯迅らについて言及した。

占春園と東京高等師範学校

遣唐使の派遣が日本文明の進歩を大きく促進したように、近代に日本に留学した中国人学生も、近代中国の後進

間に、同校は留学生7192人を受け入れ、そのうち3810人が卒業し、中国の発展の中核を担う人材となった。その後、関東大震災により、宏文学院は燃

えを変え、同校は留学生7192人を受け入れ、そのうち3810人が卒業し、中国の発展の中核を担う人材となった。その後、関東大震災により、宏文学院は燃

えを変え、同校は留学生7192人を受け入れ、そのうち3810人が卒業し、中国の発展の中核を担う人材となった。その後、関東大震災により、宏文学院は燃

えを変え、同校は留学生7192人を受け入れ、そのうち3810人が卒業し、中国の発展の中核を担う人材となった。その後、関東大震災により、宏文学院は燃

部門が追加された。1872年には編輯局を設置し、全国の小学校向けの新型教科書の作成、小学校教育計画の策定、近代教育の普及に努めている。

日本の近代初等教育の振興が成功したことに伴い、1886年に高等師範学校と改称され、日本で最初の師範学校とあげられる。その後、中等教育の着実な発展に伴い、学校は再び新しい仕事を引き受け、1929年に東京文理科大学に編入され、1949年からは東京教育大学を経て、1973年に筑波大学教育学部となった。

アジアでも初期の頃から近代教育が行われたこの学校には、中国は清王朝後期から多くのエリートを送りこんだ。

当時、近代啓蒙教育は国を治めるための必須だったため、多くの有名人が東京高等師範学校で学んだ。たとえば建国の国家主席毛沢東の妻である楊開慧の父・楊昌済は、宏文学院から東京高等師範学校に進学したのである。中国共産党第1回大会の代表である李達、中国対外友好協会の会長を務めた張香山、そして北京高等師範学校と武昌高

等師範学校の創設期の多くの教師とスタッフは東京高等師範学校を卒業した。

周恩来の入学志望校と松本亀次郎の日本語教材

1917年秋、後に新中国の初代総理になる青年周恩来は来日した。日本で最初に中国人留学生を受け入れた公立の高等教育機関である東京高等師範学校と第一高等学校（現・東京大学）への入学を目指すためだった。東亜高等予備学校に入り日本語を学んだ。この予備校を選んだのは、校長の松本亀次郎（1866～1945年）が1908年から12年まで北京の京師法政学堂（後に北京大学に編入）で外国人教師（日本語）を務め、中国人からの信

頼と評価が高かったからだ。松本は帰国後に私財と寄付により東亜高等予備学校を設立。35年間にわたり中国人留学生の教育に尽力した。

また松本はこれより前の03年、東京高等師範学校の学校長だった嘉納治五郎の薦めにより、清朝末期の中国人留学生の受け入れ先として知られた宏文学院で教授を務め、中国人留学生向けに18種類の日本語教材を執筆した。それを手にして学んだ中国人留学生は数え切れず、魯迅や秋瑾、李大釗、周恩来も名を連ねていた。

当時、日本留学ブームに沸いていた中国の主要都市でも、松本亀次郎の教材の代理販売が行われていた。その一つが、1901年に天津・租界の旭街49号（現在の和平区和平路と鞍山道の交差点）に開設された日本の商社「加藤洋行」だ。加藤洋行は南開中学の近くにあり、日本への留学を決意した周恩来は、ここを訪れ関連する教材を読んだことだろう。

周恩来が東亜高等予備学校を選んだもう一つの理由は、同校の卒業生の多

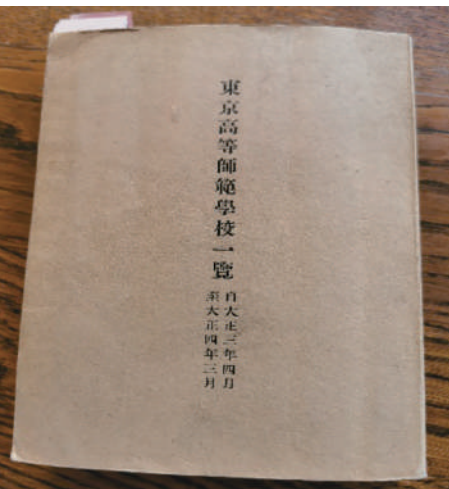
くが東京高等師範学校に進学していたからだ。東京高等師範学校は、学費や生活費、服装費などもすべて学校から提供されていたので、中国人留学生たちにとっては人気校だった。当時、中国と日本の間にあった協定により、指定された日本の高等教育機関に合格した中国人留学生は、学業を終えて中国に帰国するまで公費留学生の待遇を受けることができた。これも周恩来がこの2校を狙った理由の一つでもある。



筆者が手にしているのは周恩来ら当時の中国人留学生の多くが使ったという日本語教材

1日13時間を超す猛勉強

周恩来の日本での生活に関する資料で、最も正確で重要なのは、かつて南開大学に収蔵され、後に中国の中央文献研究室が編集した『周恩来早期文集』（1998年2月発行）に収録されてい



「東京高等師範学校一覧」

る日本滞在日記だ。この日記の日本語版『周恩来「十九歳の東京日記」』が、1999年10月に小学館から出版されている。

この日記では、「学習」がまさしく主役だ。これは、以下の統計データから見て取れる。1918年1月4日から8月7日までの間だけで、日記で「東亜高等予備学校」について40回以上、「個人指導」は30回近く、さらに「東京高等師範学校」が15回、「勉強」も11回言及している。また3月11日の日記には、毎日学習13・5時間、休憩その他3・5時間、睡眠7時間というスケジュールが記されている。このようにして、周恩来は寝食を忘れて勉強に打ち込み、来る日も来る日も学校と宿舎の間を往復した。異国からの受験生として、19歳の周恩来は大きな進学のプレッシャーを感じていたと思える。

日記には、ストレス解消のために日比谷公園を散歩したり、上野で花見をしたりした記録もある。浅草に6回ほど映画を観に行き、早稲田大学の中国人留学生を何度も訪問し、書店で『新

青年』など日本の雑誌や書籍を立ち読みした。また、たまに華僑が経営する中華料理店「漢陽樓」(現・千代田区神田小川町)に行き、安くておいしい焼豆腐(豆腐のうま煮)や清燉獅子頭(大きな肉団子の澄ましスープ蒸し)を注文しては古里の料理で食欲を満たした。周恩来は当時、二つの明確な短期目標をもっていた。それは、東京高等師範学校か第一高等学校の公費留学生試験に合格し、新しい知識を探究することだった。

日本語教材と研修旅行

周恩来の日本滞在中の学校の記録は、関東大震災で灰になってしまい、探すのは難しいが、当時彼が使っていた教材はおおよそ調査することができる。

これらの教科書は、当時の日本語教育の第一人者であった松本亀次郎が主に編集・発行したもので、他の語学学校でも使用されていた。周恩来は留学中、主に以下の数種類を使用したようだ(1、3、6、7は松本亀次郎著)。

1. 『言文対照 漢訳日本文典』中外図書局、1904年。

2. 『言文対照 漢訳日本文典』訂正第15版、国文堂書局、1905年。
3. 『漢訳師範科講義録 日本語編』1906年(内部発行)。
4. 『日本語教科書』全3巻 宏文学院編纂(松本亀次郎が主な著者) 金港堂書籍、1906年。
5. 『日語日文教科書』宏文学院編纂(松本亀次郎口述)、1907年。
6. 『漢訳 日本語会話教科書』東京光栄館書店、1914年。
7. 『漢訳 日本口語文法教科書』笹川書店、1919年。

1929年の統計データによると、『言文対照 漢訳日本文典』の改訂版は、出版以来35回重版された。『漢訳 日本語会話教科書』は、初版から20回以上も増刷された。この他、日本語教育と日本の歴史・地理・文化を融合した『華訳日本語会話教典』は1940年に有隣書屋から出版されたが、今でも学ぶ価値が感じられる。

これらの教材には、何度も登場する名所旧跡に嵐山、円山公園、琵琶湖水、南禅寺、大覚寺、天王寺、大悲閣

千光寺、萬福寺など、それと関連する
 有名人士として角倉了以（京都の豪商）
 や隠元（中国の禅僧）、高泉（隠元に従っ
 て来日した黄檗宗の僧）らが挙げられ
 ている。この他、日本の年号や古代の
 天皇、伝説上の渡来人・王仁が皇太子
 に『論語』や『千字文』を教えたこと
 なども紹介されている。

外国語を学んだ経験のある人は、丸
 暗記するしかない単語と違い、文章を
 学ぶ際に文型や文法を覚えるだけでは
 なく、その中に含まれる文化的な意味
 も吸収できると感じるだろう。周恩来
 がこれらの教材から学んだものが、や
 がて日本を理解するために行った調査
 旅行のよりどころに変わったのは想像
 に難くない。しかも、これらの現地調
 査から得られた知見は、日本を分析す
 る上での参考となり、中日関係を判断
 する際に考えを補ってくれただろう。

「日本は美しい文化をもっている」とは

日本文化の特徴を一言でいうのは難
 しいが、周恩来がどう認識していたの

かは大変気になる。対日観に結びつく
 テーマでもあるが、「日本は美しい文化
 をもっている」（『周恩来外交文選』中
 央文献出版社、1990年、90頁）と
 いう認識が基本だったようだ。

「美しい文化」観を明らかにするため
 に遺稿をひもとくと、参考として気にな
 ったのが日本留学を終える際に遺した
 詩作「雨中嵐山」と「雨後嵐山」で
 ある。やさしい言葉遣いながら青年の
 気概にあふれている。

周恩来は日本を去る前の1919年
 春、京都を探訪した。桜が咲き乱れる
 嵐山にひかれたようだ。四季を通して
 もっとも美しい風景が広がる京都は現
 在でも外国人にはたまらない記憶の心
 象風景であろう。周恩来にとっては何
 う一つ、嵐山探訪に魅了されながら日
 本の歴史を再発見したことも、美しい
 日本観を増幅したと思われる。

それは京都を見下ろす大悲閣千光寺
 への参拝が大きなきっかけになった。
 中国史の治水王を思い出させる縁にな
 る寺であり、江戸時代の儒者・林羅山
 に日本の「禹」と称えられた角倉了以

が、晩年この寺を建て居住した。利水
 事業に献身した人々の供養のためだっ
 たという。治水の先賢・禹は周恩来の
 家系と無関係ではない。周恩来の母方
 の万家では祖父・万青選およびその子
 孫まで4世代にわたって水利管理を専
 門職としてきた。周恩来は幼い頃、万
 家に入りして禹に似ししみ、中学校
 の作文で9回も禹を取り上げている。
 治水の大切さを知り、国民の生活と国
 土保全にかけがえのない事業の重要性
 を自覚していたのだと思える。

周恩来の先祖の生家のある紹興には
 親族が参拝してきた大禹陵がある。山
 腹からは繁栄した街が一望できる。大
 悲閣千光寺を見て、似たような景色だ、
 との感想をもったにちがいない。千光
 寺の坂の参道を上り下りしながら、周
 恩来の胸に去来した心情が想像できる。

京都は科学技術に敏感で、近代化の
 シンボル、琵琶湖疎水の開通を成功さ
 せると、早く水力発電を整備した。
 「電光」がこぼれる京の街並みの夜景が
 眩しかったはずだ。そもそも琵琶湖疎
 水の案を訴えた最初の人角倉了以だっ

たから、角倉了以の夢が後世の努力のもと現実になったのを周恩来が目に見ていたのである。

周恩来は「雨後嵐山」で「十数電光」を詩に描いた。

高きに登りて遠くを望むと、
青々とした山が広がり、
多くの電光が暗い市街地を照らしている。

思えば、のちに中国の総理となった周恩来は治水と水力発電の建設に力を入れた。亡くなる直前の遺言により、黄河河口に散骨された。中国の大地を潤す水との惜別であつたろう。

周恩来と美しい文化の出会いが嵐山においてもあつたと思える。

百年前の日本では、嵐山大悲閣千光寺、角倉了以、林羅山らに関する知識は一般教養であり、常識としても引き継がれていた。その一部が外国人用の日本語教科書の内容になっている。周恩来が使用した、松本亀次郎が編纂した教科書にも掲載されている。このあたりは、拙著『周恩来と日本』（三和書籍）が参考になると思う。

1919年4月5日、周恩来が詠った「雨中嵐山」と「雨後嵐山」の二つの詩のうち、1作目の「雨中嵐山」は、日中平和友好条約を締結した1978年の翌年、関西の経済界を中心に亀山公園に記念詩碑が建てられた。2作目の「雨後嵐山」は国交回復半世紀の2022年、大悲閣千光寺の境内に有志が詩碑を建てた。亀山公園と千光寺は保津川を挟んで向かい合っている。

終わりに

嘉納治五郎と松本亀次郎、そして若き周恩来が、学ぶ途中で期せずして出会えた。その現代的意味と価値については紙面の制限により触れられずになつてしまったが、「漢才」がもつ過去を未来につなげていく「磁石」作用を、再認識させてくれるのだ。

【主な参考文献】

譚路美『帝都東京を中国革命で歩く』（白水社、2016年）。

安藤彦太郎『未来にかけの橋―早稲田大学と中国』（成文堂選書、20

02年）。

王敏『周恩来たちの日本留学』（三和書籍、2015年）。

王敏『嵐山の周恩来』（三和書籍、2019年）。

王敏『周恩来と日本』（三和書籍、2022年）。

王敏『周恩来の日本生活』（三和書籍、2023年）。

（2023年5月18日・公開講演会）

筆者略歴（おう・びん）

1972年、大連外国語大学で日本語を学ぶ。1978年、四川外国語大学大学院設立準備クラスで日本学を専攻。1982年、宮城教育大学に留学。お茶の水女子大学で博士号を授与。現在、法政大学名誉教授、拓殖大学国際日本文化研究所客員教授、桜美林大学大学院国際学術研究科特任教授。アジア共同体文化協力機構参与、周恩来平和研究所所長。

公開講演会記録

「復員船」から見た復員・引き揚げ事業

日本大学文理学部非常勤講師 坂口太助



はじめに

―なぜ「復員船」なのか

一九四五（昭和二〇）年八月十五日、太平洋戦争が終結した。その時点で中国大陸（「満州国」を含む）、朝鮮半島、台湾、東南アジア、中部太平洋の島々などの地域にいた日本人は軍民あわせて六〇〇万人を超えており、こうした広大な地域からの日本本土への帰還事業Ⅱ復員・引き揚げ事業は日本政府が緊急に行うべき一大事業となった。

復員・引き揚げ事業については、その担当官庁である厚生省（現・厚生労働省）から『引揚げと援護三十年の歩み』『援護五十年史』などの詳細な記録が刊行されているほか、加藤聖文氏が優れた文献を発表している（加藤聖文『海外引揚げの研究―忘却された「大日本帝国」など』。復員・引き揚げ事業の全体的な経緯、制度・機構の変遷などについてはこれらの文献に譲り、本稿では、太平洋戦争で多くの船舶を失い極めて厳しい船舶事情のなかでどのように復員・引き揚げ事業が始まりまた進められていったのか、「復

員船」に注目して考えてみたい（復員・引き揚げには海軍艦艇も使用されているが、船舶・艦艇の総称として「復員船」という言葉を用いた）。

なお、軍人の場合を「復員」、民間人の場合を「引き揚げ」と区別して用いることが一般的だが、特に区別せずにとらえて「復員」あるいは「引き揚げ」とする場合もある。本稿では「復員」と「引き揚げ」を区別して用いる場合もあれば、全体を指して「復員・引き揚げ」とする場合もあることを初めにお断りしておく。また本文中で文献名を記す場合には著者名・文献名を

略して記した。正式なものは稿末の主要参考文献リストを参照されたい。

一、近代における日本の勢力圏と 復員・引き揚げ事業の概要

太平洋戦争は日本の敗北で終結したが中国大陸から東南アジアにかけての広大な地域がなお日本の勢力下であり、また太平洋上には連合軍の攻撃から取り残されて孤立した島々も数多く存在した。そのため終戦後、こうした広大な地域からの六〇〇万人を超える日本人の復員・引き揚げが政府の行うべき重大事業となったのであった。

最初に、ひと口に「六〇

〇万人」とはいってもどの地域にどの程度の軍人・軍属・一般邦人（民間人）がいたのか、という点を確認したい。厚生省『援護五十年史』をもとに、地域別に

【表1】地域別の復員・引き揚げ者概数（1945～1995年）

区 分		軍人・軍属・邦人計	軍人・軍属	邦人
総数		629.5万人	310.7万人	318.8万人
地域別内訳	旧ソ連	47.3万人	45.4万人	1.9万人
	千島・樺太	29.3万人	1.6万人	27.7万人
	満州	104.5万人	4.2万人	100.4万人
	大連	22.6万人	1.1万人	21.5万人
	中国（香港含む）	156.0万人	105.9万人	50.1万人
	北朝鮮	32.3万人	2.5万人	29.7万人
	韓国	59.7万人	18.1万人	41.6万人
	台湾	48.0万人	15.7万人	32.2万人
	本土隣接諸島	6.2万人	6.0万人	0.2万人
	沖縄	6.9万人	5.7万人	1.2万人
	太平洋諸島	13.1万人	10.3万人	2.8万人
	東南アジア	89.3万人	80.7万人	8.5万人
	豪州（ニュージーランド含む）	14.0万人	13.1万人	0.9万人
	ハワイ	0.4万人	0.3万人	0.0万人

1. 厚生省社会・援護局援護五十年史編集委員会監修『援護五十年史』（ぎょうせい・1997年）730頁より筆者作成。
2. 四捨五入の関係で総数や地域別合計と各項目の合計が一致しない場合がある。
3. もとの資料では「東南アジア」「蘭領東印度」「仏領印度支那」「比島」を分けて掲載しているが、上の表ではこれらをまとめて「東南アジア」の欄に表記。
4. ハワイの邦人は310人（上の表は0.1万人＝1000名単位のため「0」表記）。

おおよその数をまとめれば【表1】のようになる。

【表1】の数字は実際に終戦時に各地域にいた日本人ではなく、各地域からの復員・引き揚げ数を示すものだが全体的な傾向として以下のようなことが指摘できよう。

まず、明治期からおよそ三〇～四〇

年にわたって日本の勢力圏であった朝鮮半島、台湾、樺太（南樺太）には多くの民間人（【表1】の「邦人」）が居住していたためその比率が高いこと。また、満州は日露戦争で日本が満鉄など経済的権益を獲得していたが、さらに昭和期に入ると一九三一（昭和六）年に満州事変が勃発し翌三二（同七）年に「満州国」が建国され、国策として満蒙開拓が推進されて多くの人々が移住したため多くの民間人が居住していたこと。旧ソ連からの復員軍人・軍属約四五万人の多くを満州に配備されていた部隊（関東軍）の人員としても、満州では民間人の比率が高くなる。一方で一九三七年以降、日中戦争・太平洋戦争で日本軍が占領した地域（満州や大連を除く中国大陸や東南アジア）では軍人・軍属の比率が高い。こうした地域は民間人が大量に移住するということは少なく、復員・引き揚げ対象の多くがその地域に配備されていた陸海軍部隊の軍人・軍属であったということができよう。また、日本本土周辺や太平洋に浮かぶ島々で

も軍人・軍属の比率が高いことが見て取れる。

さらにこの表からわかることは、結果としておよそ六三〇万人の復員・引き揚げが行われた、という事実である。ではこうした多くの人々の復員・引き揚げはどの程度の期間（時間）で行われたのであろうか。その点を確認すると次のようになり、最初の一年ほどで五〇〇万人以上の復員・引き揚げが行われていることがわかる（厚生省『援護五十年史』）。さらに一九四七年・四八年にも合わせて一〇〇万人以上の復員・引き揚げが行われており、一九四八年までに六〇〇万人の人々が日本に帰還することができたのであった。

終戦〜一九四六年

約五〇九万六〇〇〇人	一九四七年
約七四万四〇〇〇人	一九四八年
約三〇万四〇〇〇人	一九四九年
約九万八〇〇〇人	一九五〇年
約八〇〇〇人	

もちろん、「シベリア抑留」「中国残

留孤児」といった重大な問題が生じたことを忘れてはならないが、戦後まもなくの何もかもが不足していた混乱の時期に、一年ほどの短期間で五〇〇万を超える人々の復員・引き揚げが行われたこともまた事実である。こうした大量の人々の移動は船で行われるのであり、なぜ短期間で大量の復員・引き揚げが可能であったのかという問題を本稿の主題である「復員船」という視点から考えてみたい。

二、終戦時の船舶事情

一九四一（昭和一六）年二月八日の太平洋戦争開戦時における日本の船舶保有量は約六四〇万総トンであり、これは英国、米国に次いで世界第三位の数字であった。戦前の日本は、現在も横浜に保存されている「氷川丸」など大型客船（おおむね八〇〇〇総トン以上）四九隻（日本郵船二七隻、大阪商船一九隻、鉄道省二隻〔関釜連絡船〕、東亜海運一隻）をはじめ膨大な船舶を有する世界有数の海運国だった

のである。

太平洋戦争開戦に際しての日本の基本方針は、石油をはじめ豊富な資源を産出し「南方資源地帯」とも呼ばれていた東南アジアを占領して「長期不败態勢」を構築、戦争を戦い抜くことであった。資源を輸送する船舶の維持・確保は日本にとって重要課題であり、開戦を前に政府・軍では船舶に関する数字が様々に検討された（拙著『太平洋戦争期の海上交通保護問題の研究』）。

政府（企画院）の計算によると、日本の経済・国民生活維持のために最低限必要な船舶は三〇〇万総トンとされていた。戦争となれば兵員や軍需品の輸送のため軍も大量の船舶を使用（徴用）し、また敵の攻撃によって船舶を失うことが想定される。しかし、船舶保有量は六〇〇万総トンを越えているうえ造船所も全力で船舶建造に取り組むので、軍の使用（徴用）や喪失を考慮しても戦いながら経済・国民生活を維持することは可能と判断されたのであった。太平洋戦争中に建造された船

舶は約三六〇万総トンであり、開戦時の保有量を加えれば船舶量は約一〇〇〇万総トンに達したことになる。

しかしその一方で想定をはるかに上回る八四〇万総トンもの船舶を喪失、終戦時の保有量はわずか一六〇万総トンという状態になっていた。しかもこの数字には要修理船や老朽船なども含まれており稼働可能な船舶はその半分以下、七〇万総トン程度という状況であった。さらにここから小型船を差し引き、遠隔地からの復員・引き揚げ任務に充当可能な程度大型の船舶（外航船）となると四〇万総トン程度に過ぎなかった。特に多くの人員を輸送できる大型客船について見れば、保有した五五隻（開戦時保有四九隻、戦時中完成六隻）の九割を超える五一隻を喪失し残存するものわずかに四隻（最大のものが日本郵船「氷川丸」一万二〇〇〇総トン、ほかに大阪商船「高砂丸」九〇〇〇総トン、「筑紫丸」八〇〇〇総トン、鉄道省の関釜連絡船「興安丸」七〇〇〇総トン）という状態であった。

つまり終戦時の日本は、（開戦時の政府の算定によれば）日本の経済・国民生活維持に最低限必要な三〇〇万総トンを全く確保できていない状況で、さらに六〇〇万人を超える軍人と民間人の復員・引き揚げ事業を行うことになったのであった。

三、復員・引き揚げ事業の開始

詳細は「はじめに」に記した各文献に譲るが、最初に復員・引き揚げに関する制度の変遷をごく簡単に述べておくと次のようになる。

各地に展開する陸軍部隊・海軍部隊の早急な復員はGHQにも求められ、陸軍・海軍がそれぞれ軍人・軍属（以下、単に軍人と記す）復員の準備を進めていた。一方で民間人の引き揚げについては、当初は外務省が「現地残留・定着」の方針を示すとともに帰国者（引き揚げ者）への対応は内務省（各地の知事）が行うこととなっていた。

一九四五年一〇月一二日には、陸軍

軍人・海軍軍人・民間人への対応を別々に行うのではなく単一の組織が責任をもって復員・引き揚げ事業を行うようGHQから指示を受け、同月八日、厚生省が責任官庁となり以後同省が中心となって事業が進められることになった。なお陸軍省と海軍省は同年一月末に廃止、それぞれ第一、第二復員省となり、数度の改編を経て最終的に一九四八年には厚生省の復員局に統合される形となった。

さて、先に見たように保有量という点から日本の船舶は厳しい状況にあったが、実際の運航についても厳しい状況に置かれていた。

終戦直後の一九四五年八月一日にフィリピンのマニラで行われた日本と連合国側との降伏に関する協議において、八月二四日一八時以降、一部の連絡船を除き一〇〇総トン以上の日本船舶の航行禁止を通達された（日本郵船『七十年史』）。さらにGHQは一〇〇総トン以上の日本船舶を管理下に置く方針を示し、一〇月に入ると米国太平洋艦隊のもとに「日本商船管理局（S

CAJAP)」が設置され一〇〇総トン以上の船舶は同局の管理下に置かれることになった。航行禁止措置はほとんど緩やかされたものの、終戦直後の日本は自由に船舶の使用方針・運航方針が決定できない状況にあったのである。

このような状況のなか、日本政府は緊急性の高い事項につき個別にGHQと協議し対応を行っていた。

終戦直後、まず問題となっていたのが朝鮮半島からの民間人引き揚げ問題であった。朝鮮半島南岸の釜山に帰国を望む多くの人々が集まっており、GHQの許可を得て八月二十八日「興安丸」(先に見たように当時日本に残されていた四隻の大型客船のうちの一隻)の派遣を決定、九月二日、多くの人々を収容して山口県仙崎港に入港した。通例、この「興安丸」による朝鮮半島からの引き揚げが公式引き揚げ船の「第一船」とされている(厚生省『引揚げと援護三十年の歩み』)。

また、中部太平洋の島々で孤立し餓死寸前に陥っている陸海軍部隊の救出

(復員)も緊急課題であった。これもGHQの許可を得て九月一日、「氷川丸」「高砂丸」(「興安丸」同様、日本に残されていた大型客船四隻中の二隻)の派遣が決定した。まず九月二日「高砂丸」が横須賀港を出港、二五日に陸海軍の将兵一六二八人を収容して大分県別府港へ入港した。この「高砂丸」による中部太平洋からの復員が遠隔地からの帰還の「第一船」とされている(厚生省『引揚げと援護三十年の歩み』)。続けて九月一日には「氷川丸」が舞鶴港を出港し、一〇月七日、陸海軍の将兵二四八六人を収容して神奈川県浦賀港へ入港した。

なお、「氷川丸」は復員七航海・引き揚げ四航海と合わせて一一航海を行い約二万八〇〇〇人を輸送している(氷川丸研究会『氷川丸とその時代』)。単純に計算すれば一回当たり二五〇〇人程度を輸送していたことになる。通常時の「氷川丸」の旅客定員は三〇〇人程度であったから、早急な復員・引き揚げ実施のため多くの人員を載せていたことがわかる。ただし「一回当た

り二五〇〇人」という大量輸送は当時日本最大の客船「氷川丸」だからこそ可能な数字であった。

船舶についての規制・制限は次第に緩和されていき、本格的に復員・引き揚げ事業が動いていくことになる。日本政府は大型船四〇数万総トンのうち二六万総トンを復員・引き揚げに使用したいとの意向を有していたが(九月一二日閣議決定「外征部隊及居留民帰還輸送船腹ノ件」外務省『日本外交文書 占領期 第三巻』、GHQからは(これも当然のことではあるが)国民生活の維持・経済復興のための海上輸送も重視するよう求められていた。やのちの数字であるが、一九四五年一月中旬の時点で実際に復員・引き揚げ任務に充当されていた船舶は約一三万五〇〇〇総トンに過ぎなかった(一月一九日「在外邦人の引揚げ状況につき通報」外務省『日本外交文書 占領期 第三巻』。一万二〇〇〇総トンの「氷川丸」一隻でその約一〇%を占めていたことになる。なお、GHQの方針、資材不足など種々の事情により

終戦直後にあつては大型船の大量建造も困難な状況であり、一九四七年末における日本の船舶保有量は約一七〇万総トンと終戦時（約一六〇万総トン）とほとんど変わらない状況であつた（日本郵船『七十年史』）。

復員・引き揚げを進めるにあたつての重大な隘路の一つが、六〇〇万人という多くの人々を運ぶための船が絶対的に少ないということであつた。船舶不足のため、終戦当初においては「復員・引き揚げには数年（三〜四年程度）かかる」と考えられていたのである。

四、復員・引き揚げ事業への日本海軍艦艇の投入

船舶の絶対数が少なく復員・引き揚げに数年を要すると見られていた状況下、日本政府が期待したのは米国からの船舶の貸与であつた。実際に終戦から三週間もたたない九月四日に米国に船舶貸与を要請したが、米国は消極的要請に応じることはなかった（九月

四日「重光・サザーランド会談」外務省『日本外交文書 占領期 第一巻』。米国も自国の兵士の本国帰還に大量の船舶を必要としており、余裕がなかったのがその一因であつた。

ただし日本側の窮状を見かねてか、九月一三日、民間船舶だけではなく残存した日本海軍の艦艇を復員・引き揚げ任務に使用することを許可した（九月一五日付『朝日新聞』。当時は夕刊がなく朝刊のみ）。

太平洋戦争開戦時、日本は戦艦一〇隻、航空母艦一〇隻、巡洋艦三八隻ほかを有し（戦時中に戦艦二隻、航空母艦一五隻、巡洋艦六隻ほかを加える）、米英両国に次いで世界第三位の海軍国であつた。しかし戦争で大きな被害を受け、終戦時に行動可能な大型艦はわずかに戦艦一隻（「長門」三万九〇〇〇トン）、航空母艦二隻（「葛城」一万七〇〇〇トン、「鳳翔」九〇〇〇トン）、巡洋艦二隻（「酒匂」「鹿島」、ともに六〇〇〇トン）、事実上練習艦といえる日露戦争にも参加した旧式巡洋艦「八雲」（九〇〇〇トン）の六隻に

過ぎなかった。ただし駆逐艦（一〇〇〇〜二〇〇〇トン）・海防艦（七〇〇〜八〇〇トン）などの小型艦艇には行動可能なものが多数（一〇〇隻以上）残存していた。

そこで武装の撤去、復員・引き揚げ者収容のための居住施設設置などの準備を行ったうえで、おおむね一〇月以降、一三二隻、約一八万トンの海軍艦艇が「特別輸送艦」として復員・引き揚げ任務に従事した。右に記した大型艦六隻のうち戦艦「長門」は復員・引き揚げに使用されなかったため（一九四六年、米軍が中部太平洋のビキニ環礁で行った原爆実験に使用され沈没）、復員・引き揚げ任務に従事した海軍艦艇のなかで最大のものは空母「葛城」であつた。「葛城」は本来航空機を搭載するための広大な格納庫に畳を敷き詰め一度に五〇〇〇人程度が収容可能であり、一九四五年一二月以降八航海で合計約四万九〇〇〇人を輸送した（珊瑚会編『あゝ復員船』）。しかしこの「葛城」や先に見た「氷川丸」のよう

船は極めて限られており、海軍艦艇を投入してもなお復員・引き揚げの完了までは相当の日時を要するものと考えられていた。

五、一九四五年秋以降の状況

GHQ、より具体的には米国は日本に対し早期の復員完了を求め（民間人の引き揚げよりも軍人の早期復員を米国は重視していた）、船舶だけではなく海軍艦艇の使用も許可した。ただし、あくまで「日本の船舶・艦艇で行わせる」というのが方針であり日本政府が求める船舶貸与に応じることはなかった。

しかし一九四五年の秋ごろになると、ある状況の変化が米国の方針に影響を与えることとなった。それは、中国における国民党（蒋介石）と共産党（毛沢東）の対立の激化であり、またそのなかでの中国に対するソ連の影響力拡大の可能性の増大であった。

中国情勢が不透明ななか、米政府内で中国にいる二〇〇万人近い日本軍

人・民間人の復員・引き揚げを早急に行うべきとの意見が生じ、また、中国の蒋介石政権にとっても大量の日本人送還事業は財政的負担が大きく（復員・引き揚げ者への食糧支援などを行っていた）、共産党との対立が深まるなかで一刻も早く日本人の送還を行いたい旨を米国に伝えてきていた。

こうして米国はそれまでの方針を大きく転換し、一九四五年一二月、復員・引き揚げ事業促進のため日本への船舶・小型艦艇の貸与を決定した（加藤『海外引揚の研究』）。そして一九四六年初頭以降、リバティ型貨物船（七〇〇〇総トン、戦時中に米国が大量建造したもの）一〇〇隻、LST（一六〇〇トン、上陸作戦・輸送任務のための小型艦艇で、艦内に人員・戦車・物資を搭載するための広大な空間が設けられている）八五隻など合計約二〇〇隻の船舶が復員・引き揚げ事業に投入されることとなったのである。米国が中国情勢を強く意識して船舶を貸与したことは、一九四六年三月一六日にGHQが日本政府に出した「引揚げに関

する基本指令」のなかで「八五隻の「LST」及び一〇〇隻の「リバティ」船は〔中略〕中国―日本間折返航海に割当てらるべし」と明確に指示していることからもうかがうことができる（外務省『日本外交文書 占領期 第三巻』）。

こうして、それまでは日本の船舶一〇数万総トン程度、海軍艦艇一八万トン程度で実施していたところに、一九四六年初頭にリバティ型貨物船一〇〇隻七〇万総トン、LST八五隻一四万トンが加わったことで輸送力が大幅に強化されることになった。これら米国艦艇の投入から約半年後、一九四六年八月一八日付『朝日新聞』の船員雇用問題に関する記事中に「復員用二百九隻の貸与船も遠距離復員が大体終わったのでリバティ型船舶百隻中の五十五隻は八月中に返還することとなり」との記述が見られる。つまり米国船舶投入から半年ほどで早くもその返還が始まったのであり、いかに急速かつ順調に復員・引き揚げ事業が進展したかがわかる。そして先に見たように一九四六年

末までに、すなわち終戦から一年数か月ほどで五〇〇万人という多くの人々の復員・引き揚げが実現できたのであった。

もちろん、依然として復員・引き揚げを待つ人々が一〇〇万人以上いたことになるが、一九四七年以降の復員・引き揚げは「復員船」よりも「ソ連との関係」が大きな要素となっていくと見ることができであろう。

おわりに

太平洋戦争終戦時、中国や東南アジアにいた日本の軍人・民間人は六〇〇万人を超えており、その早急な本土への帰還＝復員・引き揚げ事業は日本政府の行うべき重大事業となった。結果としては、最初の約一年（一九四六年末まで）で五〇〇万人以上の復員・引き揚げを行うことができた。もちろんシベリア抑留や中国残留孤児といった問題があることを忘れてはならないが、終戦後の大変厳しい状況のなか短時間でこれだけ多くの人々の復員・引

き揚げができたことは大きな成果であったと評価しても良いのではなからうか。

太平洋戦争開戦時、日本は大量の船舶と強大な海軍を保有しており世界第三位の海運国でありまた海軍国であったが、多くの大型艦船を戦争で失い壊滅状態に陥っており、終戦時に行動可能な大型艦船は客船「氷川丸」「高砂丸」「筑紫丸」「興安丸」、戦艦「長門」（復員・引き揚げには使用せず）、航空母艦「葛城」「鳳翔」などわずかなものであった。

当初は残存船舶を用いて事業が開始されたが終了まで数年（三～四年）を要する見込みで、海軍艦艇の使用も認められたがそれでも相当の日時がかかるとされていた。日本政府は米国に船舶の貸与を求めたものの当初は受け入れられなかったが、中国を巡る情勢が変化したことで米国は中国にいる二〇〇万人近い日本人の早急な復員・引き揚げの必要性を感じ、一九四五年末には約二〇〇隻（七〇万総トン＋一四万トン）もの船艇の貸与に踏み切った。

これによって一九四六年に入ると日本の輸送力は大幅に増強され復員・引き揚げ事業は急速に進み、早くも八月には貸与船艇の米国への返還が始まった。一九四七年以降の復員・引き揚げ問題は、船舶量の多少・輸送力よりも、むしろソ連との関係（ソ連の対応）が重大な要素となったと言える。

また、こうして見ると「復員・引き揚げ」という問題にも米国、中国やソ連といった周辺の国々の動向・思惑が密接に関連していることがわかり、現在にも通じる日本という国の立ち位置を示しているとも言えるのではなからうか。

【主要参考文献】

●官公庁によるもの

外務省編『日本外交文書 占領期 第一卷（占領政策への対応）』白峰社、2017年。

外務省編『日本外交文書 占領期 第三卷（邦人の引揚げ問題）』白峰社、2018年。

厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の

歩み』ぎょうせい、1978年。

厚生省社会・援護局援護五十年史編集委員会監修『援護五十年史』ぎょうせい、1997年。

●海運会社社史など

日本郵船株式会社編『七十年史』、1956年。

財団法人日本経営史研究所編『二引の旗のもとに 日本郵船百年の歩み』日本郵船、1986年。

郵船OB氷川丸研究会編『氷川丸とその時代』海文堂出版、2008年。

財団法人日本経営史研究所編『創業百年史』大阪商船三井船舶、1985年。

野間恒編『商船が語る太平洋戦争―商船三井戦時船史』、2002年。

日本造船学会編『昭和造船史 第一巻 戦前・戦時編』原書房、1977年。

●研究書など

加藤聖文『海外引揚げの研究―忘却された「大日本帝国」』岩波書店、2020年。

駒宮真七郎『戦時船舶史』、1991年。

坂口太助『太平洋戦争期の海上交通保護問題の研究―日本海軍の対応を中心に』芙蓉書房出版、2011年。

珊瑚会編『あゝ復員船―引揚げの哀歓と

掃海の秘録』騒人社、1991年。

田中宏巳『復員・引揚げの研究―奇跡の生還と再生への道』新人物往来社、2010年。

福井静夫『終戦と帝国艦艇―わが海軍の終焉と艦艇の帰趨』出版協同社、1961年。

松井邦夫『日本商船・船名考』海文堂出版、2006年。

なお講演時には会場にて「氷川丸」をはじめ複数の船舶・艦艇の写真を提示したが、文章化に際してはそれらの写真の掲載を見送った。ご了承いただきたい。

(2023年2月27日・公開講演会)

筆者略歴(さかくち・だいすけ)

1976年、東京都生まれ。1999年、横浜市立大学国際文化学部日本アジア文化学科卒業。2008年、日本大学大学院文学研究科博士前期課程史学専攻修了。2011年、日本大学大学院文学研究科博士後期課程日本史専攻修了。博士(文学)。

1999年、京浜急行電鉄株式会社

就職。2005年、京浜急行電鉄株式会社退職。2009年、日本学術振興会特別研究員(2011年まで)。2011年から現職。

・単著：『太平洋戦争期の海上交通保護問題の研究―日本海軍の対応を中心に』(芙蓉書房出版、2011年)。

・共著：海軍史研究会編『日本海軍史の研究』(吉川弘文館、2014年)(執筆部分タイトル「近代日本の海上保安と日本海軍―海難救助への対応を中心に」)。

・論文：「日本海軍による海難救助活動の数量的分析―『海軍省年報』を手がかりに」(『史叢』第100号、2019年)。「戦間期における日本海軍の宣伝活動」(『史叢』第94号、2016年)。「太平洋戦争前半期における日本の船舶喪失状況と海軍の対応―海上護衛総司令部設置経緯の再検討」(『史学雑誌』第119編10号、2010年)。

公開講演会記録

私が見た中国の30年

—1992年から2022年

日本語教師 山崎由美子

私のプロフィール&吉林大学留学の経緯

私は昭和37年に宮城県仙台市で生まれた。父は自衛隊員だった。静岡県出身の父が仙台の苦竹駐屯地に配属されていた時、母とお見合い結婚をしたそうだ。

私が2歳になった頃、父が突然、静岡に帰ると言い出し、一家は静岡に引越した。5歳違いの弟も生まれ、父は福利厚生が整った企業に勤務し、普通の暮らしを送っていた。あまりお酒を

飲む父ではなかったのだが、「肝硬変」の病に倒れ、あっけなく38歳で、旅立ってしまった。今の医学技術だったら助かっていた病だろう。その後、母の実家のある仙台に私たちは引っ越した。

私は小学校3年生の2学期から、仙台市の郊外にある小学校に転校した。母方の祖父母の家から学校に通った。田舎の学校で、授業内容が静岡県よりだいぶ遅れていた。仙台へ引っ越す前までの私は、引っ込み思案で、とても人前では話すこともできないような内気な女の子だった。それが一転して静岡から転校してきた私は、成績もよく、

活発な女の子になったのだ。私にとっての大きな人生の転機になった。体格が良い、積極的な女の子で、とにかく目立った学校生活を送った。

仙台の田舎で育ち、成長するにつれ、私は親友の影響もあり海外に目を向けるようになった。高校卒業後はCA（キャンビンアテンダント）になりたいたと夢を抱くようになった。目標をもったことは、たとえ、叶わなくても幸せなことだった。私は年齢制限まで、JALのCAの試験を毎年受けた。

結局、私はCAに合格できなくて、さて、これからどうしようかと悩んで



いたとき、ツアーコンダクター（ツアーコン）という仕事があることを知った。東北6県のお客様の団体ツアーの添乗をした。素晴らしいお客様たちに恵まれ、この職業は私の天職となった。会社の上司に入社4か月で日本全国に行けるよと言われて、半信半疑だったが、本当に全国制覇した。北は利尻・礼文島、南は石垣島まで。その後、海外添乗もこなすようになった。

私が初めて中国の土を踏んだ

私が海外添乗で、初めて中国を訪れたのは1992年8月、某病院の慰安旅行、北京ツアーだった。では、ここから本題の私が見た中国30年の始まりだ。89年の天安門事件には全く興味がなかった私だ。当時はもちろん、まだツアーコンの仕事に就いてはいなかった。それ以前の中国残留孤児の肉親捜しのニュースも全く他人事で、ニュースを見て、日本人なのに日本人に見えないなあという印象があった。その数年後、まさか自分自身も日本人に見えないと言われる

日が来るとは想像すらしていなかった。初めて訪れた中国の印象はとても強烈だった。92年の北京空港。あの独特な空港の匂いは一生忘れないだろう。匂いの記憶は深いと言われているが、本当にその通りだ。北京の空港から市内に向かうまっすぐな道。両側にニセアカシアの並木道。ガイドさんが槐（えんじゅ）の木だと教えてくれた。中国のガイドさんは、当時スルーガイドといって中国入国から出国まで添乗してくれる人と、地元のローカルガイドがいた。90年代初頭の中国ツアーの料金は全然安くなかった。それは、外国人は飛行機、列車のチケット代、観光施設の入場料、食事代すべて外国人価格だったからだ。外国人は兌換券にしか両替できなかった。外国人と中国人は乗り物の座席も食事場所も施設の入口もすべて分かれていた。あるとき、北京のとあるレストランでドイツ人のツアー客と同席した。そのドイツ人のツアー客の誰かが誕生日だったみたいで、私たちが日本人だとわかると、日本語で誕生日の歌（ハッピーバースデー）

を歌ってくれないかと頼まれた。日本人は英語で歌うと伝えたら、とてもがっかりしていた。92年当時は、故宮、万里の長城、明の十三陵など観光地はどれも外国人しかいなかった。初めて見た長安街の道路の道幅には本当に驚いた。こんな広い道があるのかと。それと自転車の数。北京でさえも自家用車は少なく、まだまだ自転車社会で車の渋滞なんてほとんどなかった。

中国はすべてにおいて、日本とはスケールが違っていた。故宮はラストエンペラーの映画の世界そのものだった。私は80年代に西太后の映画も見た。ちなみに中国人には西太后や楊貴妃は通じない。西太后は「慈禧太后」、楊貴妃は「楊玉環」と言わなければならない。

ところで、私のツアーコン時代のエピソードはたくさんあるが、代表的なものを紹介してみよう。92年8月夏の北京ツアーでの話だが、明の十三陵で、お客さんたちは見学も終え、暑さで疲れ気味だった。周りの中国人たちは、美味しそうにアイスクャンディーを食

べている。それを見た私のお客さんも食べたいと言いつ出した。ガイドさんに買ってもらうことにした。ところがガイドさんは、あんな安いアイスクャンディーを買ってくれないのだ。なぜかというと、日本人が食べたなら、必ずお腹を壊すからとのこと。菌は熱処理なら死滅するが、低温だと菌は死なない。それで、日本人は冷たいアイスクャンディーを口にすることはできなかった。大変な国なんだなあと実感した出来事だった。他にも、日本人の冷えたビール好きにも悩まされた。とにかく中国は、電力不足だし、そもそも冷たいビールを飲む習慣がないせいで、冷えたビールはほとんどのレストランで提供してもらえないことが多かった。ずいぶん、お客さんからお叱りを受けたものだった。そんな中国の添乗の仕事だったが、悠久の中国に触れることができた私は、すっかり中国にハマってしまった。会社のスタッフにできるだけ中国ツアーをくださいとお願ひした。私のような社員は珍しく、台湾、香港、マカオ、中国大陸の本当にたくさんの仕事をも

らうことができた。90年代初頭の日本は、中国ブームがあった。地方からのチャーター便もよく出発した。ある年、岩手県の花巻空港から上海までのチャーター便の仕事があった。仙台の出入国管理局の係官が花巻空港まで来て、出国手続きを無事済ませ、待合室で、チャーター便が来るのをいつかいつかと待っていたら、結局中国からのチャーター便は来ることはなかった。理由もわからず、その日は旅行社が花巻温泉を手配して、翌日解散した。仕切り直しで改めて、翌月に同じ中国ツアーを催行したということもあった。「トラベル」は「トラブル」だと言われるが、何度もこのようなトラブルを体験した。ちなみにそのチャーター便で無事ツアーを終え、花巻空港に着いて、たまたま飛行機の貨物から掛け軸を降ろすところを目撃した。100人弱のツアー客に対して彼らが購入した掛け軸は200本以上あった。日本人は、中国で掛け軸を買うのが大好きだった。いつの日か日本人がこぞって、中国旅行する時代がまた来ることを願ってやま

ない。

中国を何度も添乗で訪れているうちに、どうしても中国語を学びたくなった。仙台市の日中友好協会が開催している中国語講座などでも中国語を学んだが、これはもう中国に留学するしかないという決意して、1995年秋、仙台市と友好都市である吉林省長春市にある吉林大学に晴れて留学した。国際交流学院第1期生となった。



吉林大学国際交流学院入学式

私には北京の国際旅行社の日本語ガイドで沙銘という知り合いがいた。彼女は長春出身で、父親が病気になり、看病のために長春に来ていた。たまたま、私が住んでいる大学の寮と沙銘の実家が近かったので、お宅によく邪魔した。沙銘のお父さんと交流する中で、ある日「山崎、人參は要らないか」と聞かれ、もちろん聞き取れなかった。漢字で書いてもらったら「人參」と書いてある。なんで、私に人參が要らないかと聞くのか不思議でたまらなかった。あとでわかったが、「高麗人參」のことだったのだ。「高麗人參」は中国の東北三宝の一つである。他にも「鹿の角」「林蛙」が現代の三宝だ。昔は貂の毛皮、烏拉草といわれていたようだ。大学が冬休みに入ったころ、私は、南のほうへ旅行に出かけた。北京、洛陽、開封、鄭州、武漢などを訪れた。当時の中国の一人旅は、困難を極めた。中国語もままならない私は、中国の友人たちの協力によって、友人の友人、そのまた友人というふうに初めて会う人々に助けてもらいながらの

旅だった。こういうときの中国人は本当に頼りになる。南に移動した私は、暖かいと勝手に想像していたが、鄭州などでは、夜は寒くてオーバーを着て寝た。無事に旅を終え、武漢から長春に戻った。長春に到着したのは夜だった。無事に寮にたどり着き、部屋のドアを開けて、スチームで暖かった部屋のありがたさは一生忘れない。中国の東北地方のスチーム暖房は素晴らしいと再確認した。

さて、長春に戻った私は沙銘のお父さんの死の知らせを受けた。亡くなる3日前ぐらいに沙銘のお父さんは「山崎は、いつ長春に戻ってくるんだ？」と私のことを心配していたそうだ。そして、その沙銘の父親のお葬式で、沙銘から「私の従兄のお兄さんは警察官だから、いろいろ頼りになると思うから山崎さんに紹介してあげる」と言われた。その紹介されたのが、後に結婚する沙飛だった。彼は警察官で、日本語は話せなかった。私も中国語のレベルはまだまだ低かった。私たちは筆談で交流した。これは、本当の話なのだ

が、彼からあなたはどんな仕事が好きなのかと聞かれ、私は紙に「接客業」と書いた。これも後でわかったのだが、中国語の接客業はホステスさんのような水商売の仕事のことだそう。そういわれてみれば、そのときの彼は怪訝そうな顔つきをしていた。その後、デートを重ね、彼の家族にも紹介され、1996年6月23日、結婚式を長春市の「華僑賓館」で挙行了。結婚の決めた手になったのは、なんといっても夫の母と私の母の境遇がほぼ同じで、夫も長男、私も長女で一番上同士だったことだ。この人だったら、いろいろな価値観が合うと思った。母同士が同じ境遇という意味は、私たちの母は夫を早く亡くし、再婚した2番目の夫も早く亡くした。私の母は私の国際結婚には全く反対しなかった。私が吉林大学に留学した時点で、覚悟していたようだ。薄幸の2人の母はもういないが、私と夫は、最後まで母親たちの面倒を見ることができた。

ちょっとここで、中国語の難しさに触れてみたいと思う。夫と私のキュー

ピッドだった沙銘だが、親戚に「沙敏」という人もいて、これを聞き分けるのが難しい。他にも夫の弟の嫁が「単軍」と言い、やはり親戚に「沙軍」がいる。本当に日本人には難しい発音だ。特に名前は難しい。今は携帯電話だからいいが、以前の固定電話のとき、中国人は名前を名乗らない習慣がある。私が「どちら様ですか」と聞くまでいいのだが、相手の名前は聞き取れないのがほとんどだ。そして、「我是你大哥（私はあなたのお兄さんだ）」と言われるのも困った。どのお兄さんなのかわからない。友人でも兄と言う習慣がある。

20年間、長春市で日本語学校を経営

では、ここから、日本語学校設立の話になる。長春市で日本語学校を設立するのは、比較的簡単だった。サポートしてくださる方もいたし、夫の人脈もあった。準備期間は半年ほどで、2003年3月8日、日本語学校をつい

に開校した。学校の場所もとても重要だった。長春市の中心、人民広場に決めた。ここには「工人文化宮」という施設があった。このこと提携して教室を提供してもらった。後に学校名を考えたととき、中国では人名は付けられないと聞いていたのだが、ダメもとで、私の名前を使った「山崎外語培训学校」で申請したら、許可がおりた。日本語学校にしなかったのは、将来、他の言語も教えようと思ったからだ。

世相と学校の歩み

2003年3月8日、長春市の中心、人民広場にある工人文化宮に日本語学校を開校。

4月24日～6月30日、SARSのため学校を休校にしなければならなかった。6月、福岡一家4人殺人事件が起こり、日本留学が困難になった。

2005年、小泉首相（当時）の靖国参拜で日中友好が険悪ムードに。

2006年、温家宝首相（当時）の日本訪問を機に日本語ブームが到来。学生が急激に増加。

2010年、尖閣諸島問題が勃発。

2011年、東日本大震災。

2012年、反日デモ。

2020年、コロナ禍

2021年4月、学校の法人である夫が死去。

2022年10月、学校の譲渡手続きを終えて、日本に完全帰国。

学校を経営して苦労したこと

・教室の賃貸契約があり、前家賃も払っていたが突然解約される

20年間、学校経営をしていて、3回引っ越しをした。賃貸契約があっても、突然解約されることが2回もあった。あまりにも理不尽だが、珍しいことではないそうだ。

・チャイナリスクで突然、休校の通知が来る

一度、SARSでも経験していたが、突然、明日から休校にするように言われる。今回のコロナは本当に大変だった。一度、学校が再開できる通知があったときも、5つの部門に届け出が必要で、この難関を突破するのは大変だった。コロナが始まって、ほぼ3年は休校状態。我が校だけではないので、そ

れは仕方がないこともあるが。

・年1回の学校経営の検査手続きが煩雑、毎年変わる

我が校は正規の学校だから、毎年4月に学校の検査書類を提出しなければならなかった。その手続きが毎年、変更があり煩雑で、夫がいつも文句をいながら、書類を作成していた。現在、私は日本で某日本語学校の事務の仕事に携わっているが、日本語学校が日本の入管に提出する書類も大変だ。

まだまだ、紹介したいことは山ほどあるが、愚痴になってしまふ。ネガティブなエピソードはこれくらいにしておく。

学校を経営して良かったこと

・20年間、たくさんの生徒が日本語を勉強にきた

民間の学歴に関係のない学校だったから、生徒がたくさん来てくれた。少なくとも見積もっても延べ1万5千人、2万人は入学してくれたと思う。出国する人のための全日のクラス、夜のクラス、土日のクラス、会話のクラス、そして、小学生の授業などいろいろ、生

徒のニーズに合わせた授業を開講した。日本人と結婚する人のクラスが自然に発生したこともあった。

私自身、いろいろな場所で日本語の授業をやった。中学校、高校、大学、長春にある日系企業、IT企業の研修などなど、お陰で、豊富な日本語教育の経験を積むことができた。

・コロナ禍前までは、毎週土曜日、長春市民に無料で会話練習の場所を提供した（日本語コーナー／中国語コーナー）

私はライフワークとして、日本語学校を開校する前から、長春市の書店の一角をお借りして、日本語コーナーを開催してきた。学校の宣伝も兼ねていたし、書店の店長さんも喜んで場所を提供してくれた。学校が軌道に乗ってからも今度は我が校でずっと、毎週土曜日、日本語コーナーを開催してきた。長春にいる日本人留学生や、教師の方たちに参加してもらった。内容は、コロナ禍の前までは、「私のふるさと自慢」ということで、日本人に自分の故郷を紹介してもらった。47都道府県を制覇する意気込みだったのだが、8都



日本語コーナー

道府県で、あえなく終了してしまった。コロナさえなかったら、今も続けているはずだ。本当に残念だ。

・教師になりたいという夢が叶った

実は、私は小学校の卒業文集では、将来、教師になりたいという夢を書いた。中学校のときにいろいろな影響で外国に憧れるようになり、CAを目指すことになった。CAになる夢は破れ

たが、元々は、海外に憧れていたもので、ツアーコンダクターとして、仕事で国内外、いろいろな観光地に行けたのは、ラッキーだった。家族から天職と言われた。でもツアーコンよりもっと天職で、元々の夢だったのが教師だった。それも自分で学校を経営するなんて、本当に夢のようだった。辛いことも多かったが、中国が大好きだったので、素晴らしい人生を送ることができたと自負している。中国人にたくさん、助けられたので、今度は日本で、恩送りするつもりだ。残りの人生、日中友好に少しでも貢献できたらと思っている。

・たくさんのお会いがあったー「桃李満天下（至るところに教え子がいる）」偶然に入った中華料理屋に私の生徒がいた

現在、私は東京都内に住んでいるが、日本に戻ってすぐ、たまたま京成高砂駅の駅前にある中華料理屋に入った。そこは中国人が経営している店だ。店員さんも中国人だったので、出身地を聞いたら、长春市と言うではないか。山崎日本語学校を知っているか聞いた

ら、なんと我が校で日本語を勉強したと言ったので驚いた。こんな出会いがまた東京か日本のどこかであると思う。世間は広いようでとても狭い。

私の中国人の印象

私は30年間、中国人と付き合ってみていろいろな感じたことがある。一括りに「中国人は○○○」だとステレオタイプでの考え方はだめなのは百も承知だ。ただ、あくまでも個人的な意見だが、中国人の欠点は共通項があるような気がする。日本人の欠点も同じだが。たとえば

- ①口答えがすごい。必ず言い訳を言う。
- ②備品の補充ができない。
- ③メンツが何よりも大事。「好面子」。
- ④自分の仕事以外はしない。よいいなことはしない（日本人もそうだが）。
- ⑤凭什麼？（日本語訳：なんで、あなたの言うことを聞かなければならないの？）。
- ⑥授業で名指しした人の周りの人が答える。

⑦前もってがない。「報道相」がない。文化的な面では

- ①プレゼント文化：必ず2個（対で）大きい物、高価な物をプレゼントする。あげた物を職場に置いたままにする。時計はあげてはいけない。出産祝いに哺乳瓶はあげてはいけない。
 - ②梨を切ってはだめ。
 - ③料理は残すこと。ビールが来てもすぐに飲んではいけない。2〜3品の料理が来てから。
 - ④ゼスチャーの違い。月／日が反対。テストの☑は正解の意味。
 - ⑤苗字と名前の間は空けない。白い紙に黒い字を書かない。
 - ⑥お葬式（火葬）が過ぎたら、お香典はあげない。お葬式に來ない。
- 帰国後、戸惑うこと
- ①バスを降りるとき、早く出口に移動して、運転手さんに叱られる。
 - ②背が高いと言われる。長春では背の高い女性が多い。
 - ③ゴミの捨て方が慣れない。
 - ④蕎麦をすする音にびっくり。
 - ⑤クリーニング代が高すぎる。

中国のゼロコロナを経験して

最後に私が体験したゼロコロナを時系列でまとめてみた。私は2019年12月末に、年末年始を当時日本の大学に通っていた息子と一緒に過ごそうと一時帰国していた。

2020年1月26日 一時帰国から長春に戻った。このとき、まさか中国がマスク不足になるとは予想もしていなかった。

2020年2月 外国人のコロナへの取り組み方ということで複数のメディア(新華社他)から取材があった。

2020年夏 スマホの健康コードアプリが必要になった。身分証番号がない外国人はスマホの健康コードが登録できず、特別な外国人専用の健康コードを使用。最終的に外国人がパスポート番号でスマホに登録できるようになったのは、2022年4月末からだった。2020年12月〜2021年2月 夫と仙台の東北大学病院に病気治療のため来日。中国に戻ったとき、2週間の

隔離(瀋陽で)。高铁で長春に移動(自家用車は不許可)。その後、1週間は長春のホテルで、最後に自宅で1週間、隔離生活。一步も外に出ることは禁止。

2021年6月 外国人だけが集められて、有料でワクチン接種。1回につき100元×2回。

2022年3月11日〜4月28日 長春がロックダウン。私は延吉に滞在していた。延吉のロックダウンは3月13日〜3月31日。長春市でロックダウンされていたら、私はどう生活していたか想像できない。食料の調達など、外国人の私には無理だった。親戚や友人たちもサポートできない状況だったそうだ。私は運よく延吉で、ビジネスホテ



外国人居住者の新型コロナワクチン接種風景

ルでの生活だった。3食付き、生活用品も何の不自由もなく生活できた。部屋のゴミを捨てながら外の空気を吸って、ホテルの周りを散歩していると、さすがに部屋に戻りなさいと見回りの人から叱られたりした。ホテルの部屋から延辺大学の学生寮が丸見えで、大学のキャンパスの様子がうかがえた。大学生は門から一步も出ることはできなかった。毎朝、棟ごとに列をなして、PCR検査に行っていた。

2022年6月2日〜 延吉から長春に戻ったとき、自宅で1週間隔離。3日に1回だったPCR検査が毎日検査になったり、また3日に1回に戻ったり、目まぐるしくPCR検査のスケジュール変更があった。PCR検査場が至る所にあった。無料で簡単にできるのだが、限られた時間内で、行列に並ぶ必要があった。

2022年9月 瀋陽に仕事で1か月滞在。健康コードの他に場所コードも必要。交通機関利用時や大きな施設に入るにも場所コードが必要。長春に戻って、また1週間の自宅隔離をしなければ

ばならなかった。

2022年10月 長春―大連間を高铁で移動。大連から成田に無事に帰国できるかとても不安だった。日本帰国前のPCR検査の書類をそろえるのが大変で、中国の友人に病院まで付き添ってもらった。本当に友人たちのサポートがなかったら、日本に帰国することもままならなかった。コロナ前は長春空港から成田までの直行便が週4便あった。それがずっと欠航になってしまった。2023年4月1日から週1便がやっと運行を再開したようだ。昨年、私が長春から大連まで高铁で移動する2〜3日前から、自宅近くで感染者が出たという情報が入った。大連から無事に日本に帰国できるか、不安で仕方がなかった。大連には亡き夫の甥っ子がいる。大連駅を出たら、甥っ子が私を出迎えてくれた。大連駅近くのホテルに宿泊。翌日、大連の空港まで甥っ子が自家用車で送ってくれて、無事帰国できた。成田空港に着けば、今度は息子が迎えに来てくれているはずなので、息子と再会したら、号泣するに違

いない。周りに人がいて恥ずかしいけれど、感情は我慢できないだろうと覚悟していた。成田空港の到着ロビーに出て、息子を探したら見つからない。すぐに息子の携帯に連絡したら、出口を間違えたらしく、しばらく待たされた。おかげで、号泣せずにすんだ。

これからも中国と関わり続ける

繰り返しになるが、私が初めて中国を訪問したのは、1992年の夏。あっという間に30年が過ぎ去った。30年前の日本と中国は、今とは比べることができないくらい経済力の差があった。この30年の中国の発展は、目を見張るものがある。ちょうど中国が発展するプロセスを私は目の当たりにすることができた。私は、人生は「縁と運」が大きく影響すると信じている。私は日本から「近くて遠い国」である中国と縁があったのだ。私は中国を愛してやまない。中国が大好きだ。これからも中国との縁を大事に、日中友好に少しでもお役に立てればと思う。

(2023年5月11日・公開講演会)

筆者略歴(やまざき・ゆみこ)

仙台市で生まれた。

1995年9月、吉林大学に留学。

2003年3月、長春市山崎外語培訓学校を開校。

2022年10月、日本に完全帰国。

【中国から授与された賞】

吉林省長白山友誼賞、吉林省優秀外国専門家賞、吉林省優秀外国籍教師賞、長春市友誼賞、長春市突出貢獻専門家賞、長春市優秀外国専門家賞、長春市優秀外国籍教師賞。

陶々俳壇

会 句 陶 陶
結 果
2023年2月

兼題 「父」

馬場由紀子

葉を垂れて寒さに耐える大根引く 伊藤正堂

○紅杓

「大根引く」は大根を収穫することを行い、晩秋から初冬にかけて葉を両手で持って畑から抜き取る。雪の中の作業になることもある。初冬の季語である。莖葉がだらんと下がってきたら水を欲しがっているサインであるといわれている。季語「大根引く」のこの句の情景の表現に占める意義は大きく全てとも受けとられる。一茶の「大根引き大根で道を教えけり」は俳諧味があり、虚子の「流れゆく大根の葉の早さかな」は日々の営みが生み出す一瞬の光景を鋭く切り取った写実性ある句である。

○善一

霜が降り大根の葉が霜に焼けてしおれている。しかし根はしっかりと大地にうまり味がより美味しくなる。それをしっかりと大地から引き抜き、炊いたり、おろしたり、冬の美味しいものの一つである。

○正子

ふるりの城に登れば春霞 //

○紅杓

韓国で日本海側に山越えた際に濃い霞に閉ざされて難儀しました。大陸は大河だけでなく自然も大きいと感嘆しました。

●由紀子

既視感ありますねえ。「春霞里の天守を浮かべて」としても。

春耕へ鋤の手入れや父の背中 松島二三四

○正堂

畑仕事にこの春も耕具の手入れに余念なく父の背中が嬉しい。

○正子

○由紀子

田舎で育ったのでこのような景をよく見知っています。切なく郷愁を誘われます。腰の曲がった年寄りが野良でせつせと働く姿はとつてい真似ができません。

●明良

○由紀子

赤と白の対比、そして、樺の硬さと土塀の堅固さが響き合う。白い土塀のある質屋の蔵のあるところに真っ赤な寒椿が咲いている。赤と白の対比を上手に句にしている。

○善一

○紅杓

質屋と土蔵はひと昔まえには対の景色でした。信じた友に貸したラジオは入りっぱなしになりました。

父と子と 列を違へて麦を踏む 大内善一

○正子

「列を違えて」が麦を踏み動きまで伝えています。

○正堂

○由紀子

良い景ですね。最近若い人の農業回帰が見られるようで頼もしく感じます。小学校時代に麦踏みの勤労奉仕？に行ったのを思い出しました。もちろん戦後。

●明良

○正堂

○紅杓

○由紀子

初春の景が決まった。お寺も訪れる人が減って住職がいなくなるとうところが多いようです。信仰心もなく道義心も失われた社会となりつつあり寂しい気がします。

花菰の緑たくはへ咲くを待つ 日野正子

○明良

○善一

春を待つ心が鮮やかです。花菰はヒガンバナ科の多年草。葉は緑色、扁平で幅狭。ニラに似た香り、花は二〜三センチで白色、六弁、紫色。細かいところをよく観察しているのに感心。

○正堂

公園の父と子連 風高く揚げ //

○善一

春先長崎を訪ねた折、友人にさわれ岬の公園の風揚げを見に行ったことがある。たくさんの人たちが色とりどりの風、長い連風を揚げ楽しんでた。なつかしい風景を思い出させてくれた。

●明良

子どもの頃は風揚げが楽しみでした。孫たちは寒空の風揚げよりゲームです。

父逝きてはや半世紀 寒の明け 橋本紅杓

○正子

○由紀子

父の恩は時を経て鮮明である。半世紀を経て一つまた心の区切りをつけることができたのか。春の兆しがそつさせたのかもしれない。

神田川水の流れやどこか春 //

○明良

○由紀子

水の流れも心で感じるのでしょうか、どこか春が言い得て妙です。「神田川水の流れのどこか春」とした方が。

霜柱しばし見とれて踏み石に 瀬崎明良 //

●明良

関係した明石大橋完成から一年後の惨禍でした。橋の下を通った断層で「メートル径間が伸びましたが幸いにしてつり橋だったことで影響はありませんでした。

かたかこの花や幽けき水の音 馬場由紀子

○明良

○善一

もつ少し経つと近くのかたくりの里に咲きます。幽けきと水が似合います。早春明るい林などに群落している。そのうつむきかげんに咲いている近くの小川の水がすかすかに聞こえてくるいい田園風景である。

○正子

草萌の径 老人と老夫婦 //

○明良

○正堂

自然は春を知らせますがみな老いてゆく身につまされる儚い句です。

陶々俳壇

会 句 陶 陶
結 果
2023年3月

兼題 「宮沢賢治」

馬場由紀子

汽笛幽か午前零時の冬銀河

松島二三四

○由紀子

宮沢賢治でこの句ができたとはお見事です。俳人らしい想像の広がりが見られます。

○善一

冬は気が澄み凍空かつなすかに夜行列車の汽笛がひびき渡って来る。時計を見ると午前零時、窓を開けると冬銀河が輝いていた。

○明良

吉兆の雪形写す筆運び

○正子

どんな雪形?どんな絵でしよう?と想像します。

○善一

降り残った雪の雪形が、何か良いことを思わせるように残っている。わが故里福島の高妻山には馬が走る雪形が表れる。いよいよ田植の時期を知らせてくれる。その景色を残すべく筆を走らせている。

○紅杓

名残雪縫つて東北新幹線

○善一

旧暦二月中旬に降る雪を「名残の雪」という。その中を東北新幹線が縫つように走って行く。いい旅が見えるようだ。

○由紀子

「宮沢賢治」の句ですね。現代的でこれも面白い。

せせらぎの光柔らか春めきて

○正子

何気ない景ですが、春の訪れが水と光で表現されています。

○善一

小川の浅瀬を流れる春の柔らかな光を受けている。ようやく寒い冬から春の到来を思わせる。

○正堂

比良八荒何遺さうか賢治の詩

○二三四

「比良八荒」は不勉強にして初めて知りました。早春琵琶湖に吹き下ろす強風で、とくに災いをもたらすとのこと。自然を畏怖する賢治の詩のストイックさがよく合っていると感じました。

水温む樹林映して池の鯉

○善一

池の水が春光を受けて温んで思える。そこに付近の樹木が映っている中をゆうゆうと池の鯉が泳いでいる。映っている樹林が揺れている。

●由紀子

「樹林を写す」としても。

新じやがの丸揚げ熱しピンポンパン

○二三四

オノマトペが楽しい。小ぶりの新じやがのコロコロした感じ、素揚げの熱々感がよく伝わります。

○明良

卒園の親子包む香沈丁花

○正堂

幸せそうな親子を沈丁花の芳香が包む。一番幸せな時期ですね。

空みぞれ宮沢賢治が途を往く

○明良

○正堂

●由紀子

「空」はいらないでしょう。「」遠野賢治の途の雲るる」

九十歳成り自分史記すや春炬燵

○紅杓

自分史は自分の世界を深め、他人とのつながりを大きくする素晴らしい機会となるメリットがあり、自分史を作成することは残りの人生をデザインするうえで重要だといわれる。「九十歳を「卒寿」と表現しなかったのは訳があるのだろうか。

○正子

「春炬燵」が上五中七をしかり受け止めています。

○二三四

頼もしい。ぜひ完成していただきたい。九十歳は「くせ」と読みます。

麦踏を促す里へ久々に

○明良 戦後の学徒動員で経験しました。
○正子 「麦踏」が句の景色を生き生きと広げています。
○正堂

梅の枝十三回忌墓の前

○二三四

東日本大震災の供養でしょうか。梅の白き香りが御霊を慰めてくれるように安らぎます。三段切れつぽい点は工夫できそつに思えます。

●由紀子

故人への優しい想いが伝わってくる。ただ、単語を三つ並べただけになってしまったので「母の忌に捧げ祀らん梅一枝」と。

●明良

相模川河原淀みて梅見とき

○正子

河原は水が無い所ですが、これは水嵩が増したということでしょうか。今ひとつはつきりしないかな。

卒寿過ぎ賢治の意気で春耕す

○正子

胸に迫るものがあります。私は今年卒寿を迎えた。宮沢賢治は地元の盛岡高等農林学校を卒業。地元農業のために尽力した。

○善一

○明良

○由紀子

励ましの意を込めて取らせて頂きました。農がお好きなんですね。

○正子

○紅杓

○由紀子

のどかで良い景ですね。

風に押されて芽吹の径を歩みけり

○正堂

春の雲ひねもす猫は寝てあたり

○紅杓

○二三四

猫と「ひねもす」寝ているイメージはぴったり。

中国

ウエッチング

編・訳 上松玲子

「看護は自腹で」がなくなる日

入院の際、付き添い看護人費用が医療費より重い負担になっている、と述べたのは数件の病院に転院しながら70日余り入院を続けていた75歳の李文昌さん（仮名）。医療費と薬代の自己負担額は1万余だが、看護費用は1万7千元以上かった。30代の河北省唐山市民、許さんもこの4月に脳内出血で入院し、一對一の付き添い看護人に1日340元支払った。病院の看護

費用は1日15元のみである。

この現状を不合理だと感じる市民は少なくない。看護師不足もあり、感染症病棟など特殊な病棟以外、患者の日常の身の回りの世話は家族か患者に雇われた付き添い人が行う。

国家衛生健康委員会が2020年8月に発布した「医療機構の看護業務の一層強化に関する通知」では、看護師が足りないときは医療機構が実際の需要に基づき訓練を終えて合格した看護師を一定人数配置し、規範管理を強化するように提起しているが、一部地域を除いて医療看護体制整備は遅々として進まない。安徽省政治協商会議委員で安徽中医药大学第一附属病院の姚準芳主任医師は、病院運営に配慮して大型の医療設備を購入すれば、看護業務への予算は減る。利益を考えれば、医療看護師拡充に金を出す話にはならないと指摘する。

2022年8月、福建省は公立病院入院病棟の付き添い看護人ゼロを目指し、専門チームで試験的改革に取り組んだ。

財政、医療保険、患者の一部負担を原則として看護師と看護人（原文では護士と護理員）からなる看護従事者が連携する体制を作り上げた。看護人は病院が直接雇用あるいは労務派遣で受け入れ、病院が責任をもつて管理する体制をとった。姚氏は残された多くの課題を指摘する。看護項目の個人負担か公費負担かの線引き、ケアサービスパラの算定方法、看護人の仕事の明確化と雇用形態などだ。

『法治日報』2023年6月13日

教師の引き抜き禁止以外にも

教育の地方間格差解消を目的とした初めての政令文書が発布された。「優良で均衡のとれた公共教育サービス制度構

築に関する意見」である。その中で注目されるのは、「発展した地域は中西部地区の優秀な校長や教師を引き抜いてはならない」という規定だ。

学校選択制は一向に冷める気配がなく、熾烈な教育の「軍備競争」の中、前述「意見」は学校建設の標準化と地域格差の縮小を主眼としている。

地域格差や学校格差、社会階層格差問題を解決するためには、改革前にとにかく駆け込みで差をつけられるだけつけておいて優位に立とうという誤った姿勢を正さなければならない。教育の公平の問題はとりわけ、フレキシブルワーカー、新しい就業形態の労働者、農村からの移住者の子女の義務教育なども、おろそかにしてはならない。

『澎湃新聞』2023年6月14日

増えすぎた電動自転車

今年3月末現在で広州市の

電動アシスト自転車の登録台数は322万台におよんでいる。これは現在の道路、駐車スペースの許容台数をはるかに超えている。広州市公安局は新しい法案について社会に意見を求めている。新法では運行を市中心区域に限るとした現行法を一部の道路に限るとすること、24時間、昼間、ラッシュアワーなど時間帯ごとに制限を設けることになる。

広州社情民意研究センターの羅蘭茹副主任はこれらの改正は事前に聴取した市民の意見に基づくものだという。社会として共通の2つの認識は、電動自転車市民にとって買い物や子どもの送迎など近距離の移動に欠かせないものになっており、規律によって、車や歩行者との穏健な共存を図るべきだということ、中心市街区域の朝晩の混雑を考えると車以外の立ち入りは制限すべきだということだ。

広州交通警察は第三者の研究機関と連携し、各道路の役割、人や車の流れ、バスや地下鉄のカバー率、自転車専用道路設置の可能性について分析と評価を行い、走行路線と通行時間の最適化を図っている。

羅氏は「自転車とはいえ自動車並みの速度が出るものや、車道を走るものもある。一年ごとの登録更新や違反者への罰則など、車同様の管理をすべきだ」という意見が多く、市民から寄せられた」と述べた。

『広州日報』2023年6月15日

労働者の涼む権利

極端な高温が続く北京、フーデリバリー配達員の李凡は毎日朝9時からショッピングモールが閉店する夜10時まで13時間働く。「同業者たちはここ数日は藿香正気水（漢方製剤ドリントクの名）や水分を取り、休憩しながら働いてい

る」という。

李凡は北京に来て数年になるが高温手当はもらったことがない。ただし、配達料が臨時で0・5元から3元ほど上乘せされるといふ。

全国の28の省市で高温手当の基準が示されており、北京の場合6月から8月、35度以上の屋外での作業員には月180元以上、33度以上の室内での作業員には月120元以上と規定されている。海南島では7か月にわたり支給され、広東省、福建省では5か月間にわたり支給される。

天津君輝法律事務所の何金宇弁護士は、高温手当は企業の福利ではなく、法律で定める労働者の權益であるため、天気手当や臨時金で代替できるものではないと指摘する。

北京弁護士協会の時福茂副主任は、高温手当に関する問題はフレキシブルワーカーに多く見られると指摘する。

現在多くのフードデリバリーの配達員はアウトソーシング、またはクラウドソーシングや契約労働であるため労使関係が明確でなく証明も難しい。また勤務時間、勤務場所も一定でないため、管理や保障が受けにくく、労災認定されることは稀である。

人力資源社会保障部、全国总工会など4部門連合で発布した「防暑降温措施管理办法」は今から10年以上前に出されたもので、労働部の「給与支払暫定規定」は今から30年以上前のものだ。フレキシブルワーカーがこの10年余で急拡大し、労使関係が曖昧なものとなり、労災であろうと、高温手当であろうと労働者の權益を守るのは難しくなった。一日も早く給与法改正によって高温手当が義務付けられることを望む。

『中国青年報』2023年6月28日



◆令和5年度第5回理事会の議題（7月20日開催）

今月は下記内容で審議を行った。

・確認事項

6月8日に開催された第4回理事会の議事録（案）が確認された。

・報告事項

- ①「満洲国の話」（古海建一著）の製本について。
- ②国際交流委員会の太原植林事業視察旅行参加者の会員以外からの募集について。
- ③講演委員会の上映会（『一陽来復』について）。
- ④事務局報告

7月28日に、「将来検討委員会の提言」説明会と「暑気払い」を開催する。協会の夏休みは、8月14～16日の3日間とする。

（事務局長 竹前栄男）

会員だより

◎長寿祝賀会のお知らせ

9月14日（木）正午より新橋亭新館にて長寿祝賀会を開催します。コロナ禍で3年間開催できず、今回4年ぶりです。本年度祝賀長寿者はじめ3年間の祝賀長寿者もお祝いいたします。

会費は5000円。参加希望の方は、事務局までご連絡ください。

●本年度祝賀長寿者（正会員・敬称略・生年月日順）。

〈白寿〉（大正14年生まれ）

森川伸

〈米寿〉（昭和11年生まれ）

馬場永子、鶴留エマ

〈喜寿〉（昭和22年生まれ）

中谷雄二、成多芳秀、杉本孝、増野亨、三原朝彦、宮内雄史、浦川剛

同好会だより

〈俳句会〉

対面とオンラインでの俳句会を開催しています。

〈謡曲会〉

松木千俊先生のお稽古は一人ずつの個人指導です。

みんなの写真館

世界で一番美しい街（表紙）

今年6月に訪れたチェスキークルムロフは「世界で一番美しい街」のキャッチコピーで人気上昇中の中欧チェコ共和国の南ボヘミアにある小さな街です。ウルタヴァ川により二分された街には、13世紀に南ボヘミアの貴族により建てられた城がそびえ立っています。14世紀には支配者が移り変わるなかで華々しく発展を遂げ、16世紀、ルネッサンス都市としての現在の姿が出来上がり、繁栄の頂点に達しました。しかし、次第に近代化から取り残されて行く運命に。そのおかげで当時の美しい風景がそのまま現代まで保存される結果につながりました。この街を歩けば、ルネッサンスにゴシック、それにアールヌーボーなどその時代にはなかったさまざまな建築様式の建物に出会えます。その多くは現在でも美しく保存され、住居として利用されています。赤やオレンジ色の屋根瓦が連なる中世の街並みが美しく残り、1992年に世界遺産に登録されているこの街は「眠れる森の美女」とも称されます。そのため、街全体が中世時代から時の流れが止まったような印象を受けることでしょう。ここから見えるのは空に向かって伸びる街のシンボル、チェスキークルムロフ城の塔を中心とし、街を抱くウルタヴァ川の流れ、屋根のオレンジと丘の緑が美しく調和された色合いの街並みです。（姜晋如）

鄧小平氏の柔らかい手

（表4上）

1970年代末、中国は改革・開放路線へ大転換―その「総設計師」といわれた鄧小平氏は気さくに外国人記者にも握手を賜わった。やわらかい手だった。（田畑光永）

ものすごく真面目（表4下）

それからおよそ10年―1989年春、民主化を求める学生たちが、続々、北京へ集まってきた。話を聞くと、皆、ものすごく真面目だった。この約3週間後、あの「六・四惨劇」が起る。（田畑光永）

2023年9月の行事予定

- 1日（金） 13：45 講演委員会主催 映画『一陽来復』上映会とユンミア監督トークほか
場所：ドームホール（北とぴあ6F、東京都北区王子1-11-1）
参加自由（無料）、13：30開場、13：45開始
- 7日（木） 14：00 公開 第13回対面&オンライン講演会
「ゴジラと満洲—植民地科学史研究の視点から」
山口直樹氏（北京日本人学術交流会責任者）
- 12日（火） 14：00 謡曲会（松木千俊先生お稽古）
- 13日（水） 13：00 対面&オンライン俳句会
兼題「透明」及び当季雑詠から5句を投句（8月末までに）
- 14日（木） 12：00 長寿祝賀会（於新橋亭新館）
（事務局に事前申込み必要）
- 28日（木） 14：00 公開 第14回対面&オンライン講演会
「グローバルマーケティングから見た、コロナ後の世界」
大石芳裕氏（明治大学名誉教授、グローバル・マーケティング研究会代表世話人）

※対面&オンライン講演会は、当会ホームページにて開始1時間前にZoomの招待をアップしています。（<https://www.kokusaizenrin.com>）

9月の会議予定

5日（火） 13：00 国際交流委員会	21日（木） 13：00 理事会（第6回）
11日（月） 14：30 講演委員会（Zoom）	21日（木） 15：30 広報委員会
12日（火） 13：00 環境委員会	27日（水） 13：00 東北委員会

※下線は通常日程に変更あり。

【10月第1週の講演会予定】

- 5日（木） 14：00 公開 第15回対面&オンライン講演会
「近時の金融政策と日本経済の課題」（仮題）
原真人氏（朝日新聞経済担当編集委員）



発行所

〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五

一般社団法人 国際善隣協会

電話 〇三三五七三三〇五（番代表）

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<https://www.kokusaizenrin.com>